

『インドへの道』における語りの分裂と

帝国主義デイスコース

松宮 園子

今世紀初頭、イギリスの植民地であるインドを舞台にした E. M. フォースターの最後の長編小説『インドへの道 (A Passage to India)』を巡る評価は様々な変化を遂げてきた。インド人の反英感情の高まりと共に、独立運動が激化していた一九二四年の出版当時は、現実の社会問題を扱ったタイムリーな読み物として大きな注目を集めた。その当時は多くの人々が、インドに駐留するイギリス人のインド人に対する露骨な差別意識を鋭く描写したフォースターを、人種的偏見にとらわれない良心の声、人道主義の鏡として賞賛したのである。やがて帝国主義が過去のものとなるにつれ、小説の哲学的なテーマが重視されるようになり、小説中のインドは現実の国であるよりはむしろ抽象的な意味での「他者」を象徴するものと考えられ始めた。しかしポストコロニアル批評の隆盛を受けて近年インドという小説の舞台は再び脚光を浴び、その再評価の波の中でフォースターの人道主義を問い直す動きが起こってきた。つまり在印イギリス人の批判者ではなく、彼らの同類としての作者のデイスコースが指摘されるようになったのである。更に、本作のテーマが「政治よりも大きなもの」であるという彼の主張そのものが、芸術の絶対性、自主性を謳いあげたモダニズム的な傲慢として批判され始めた。

確かに小説中には、インドの混沌ぶりを冷ややかに見つめ、イ

ンド人をステレオタイプ化する語りも散見される。しかし作者が目指した「政治よりも大きなもの」とは、政治から完全に切り離された純粋な芸術世界を意味するのではなく、個人の意識に抜き難く潜む人種的偏見や差別意識を含みながらも、それでも他者とのつながりを模索する人間の可能性である。異文化に接した際の違和感や、時には不快感を徹底的に排除するのではなく、そうした感覚を支配的なものにならないこと、そして他の感じ方、見方があることを常に認める姿勢こそが、この小説の大きな枠組みと言える。そしてそのために作者が採用したのが、「分裂した」語りである。フォースターのこれまでの作品では、他の多くのモダニズム文学とは異なり、読者に直接語りかける言わば一九世紀的な語り手が採用されていた。所謂三人称の語りでありながら、頻繁に自己言及する人間味溢れる声はその背後に生き生きとした人格を窺わせ、「フォースターの声 (Forsyterian voice)」と総称されてきた。しかし『インドへの道』ではこの親しみ深い声は消え、人格を失った語り手のアイデンティティは揺らぎ続ける。本作におけるこうした語りの特徴は、マラバル洞窟に代表される哲学的テーマの探求の手段としてこれまで解釈されてきたが、自らのうちにある帝国主義デイスコースを弱体化するために作者が編み出した技法としても評価できるのではないか。如何に親しみ深くとも、イギリスの、白人社会の権威に属した「フォースターの声」を捨て去ることで、散見されるイギリス的な見方はあくまで一つの見方に留まり、全体の枠組みとしての *Englishness* は抑制されているのである。

本作の語りにおいては、超越的な声と人間的な声が混在している。そしてそれぞれの声の中でさえ、語り手のアイデンティティ

は様々な変化を遂げるのである。前者の例としては、小説の冒頭で地表にへばりつく人間を遙かな高みから見下ろしているような語り手の声が挙げられる。人間界を離れた動植物の世界、更には宇宙の彼方まで視野に収める語り手は、一見人間性を排除した「全知」の語り手であるかのように思われる。しかしその一方で、彼の發言の不確実さ、自己修正の多さは顕著である。こうした曖昧性が、第三部で描かれるヒンドゥー教の祭りで頂点に達するインドの特色であることは言うまでもない。つまり西洋的な「全知」とは程遠く、語り手の権威とアイデンティティは常に揺らいでおり、時にインドを見下ろし、時にインドによって支配されているのである。同様に、「我々」という代名詞を多用して人間性をアピールする人間的な語りも、その視点を確定することなく西洋と東洋の間を漂っている。過去の作品で頻出した自由間接話法を用いた語り手と登場人物との密接な融合は、本作においては姿を消している。価値観を共有できる、分身となるような登場人物を持たない語り手のアイデンティティはここでも曖昧なままである。常に揺らぎ、変化する「我々」は時にインド人を含み、時に明確にイギリス人を指す。このような曖昧さの結果、語り手の権威は常に不完全なものとなることを余儀なくされる。ヒンドゥー教の祭りにおけるインド人の宗教的熱狂について、語り手は「我々の目から見ればただの混乱である」と述べるが、この「我々」が誰を指すのかという根本的な点が揺らぎ続ける以上、彼は確固とした解釈者にはなり得ない。非ヒンドゥー教徒のインド人を巧みに情景に加える等の操作によって、語り手は西洋対東洋という単純な二項対立と自らのアイデンティティの確立を拒み続けるのである。

このように何重にも分裂した語り手の声は、語りの破綻、崩壊として批判されることもしばしばである。確かに、カメレオンのように変化する語り手は小説にある種の混乱、まとまりのなさを与えているが、それならば分裂した声の対極にあると考えられる「全てを纏め上げる声」「統合された声」は、望ましい語りと言えるのだろうか。批評家スーザン・S・ランサーが指摘するように、小説世界を完璧に掌握する一九世紀半ばのリアリズム小説の語り手が、自らの倫理的・知的優越に対する絶対の自信をもって植民地主義を押し進めたヨーロッパ帝国主義の精神を表すとすれば、本作における分裂した声はそのアンチテーゼであると評価することができる。もちろん作者自身が主張したように、本作は帝国主義批判のみを目的とした政治小説ではない。しかし頻繁に言及される広大な宇宙のヒエラルキーや非人間界の神秘等の超越的・哲学的テーマは、一方で支配者と被支配者の二項対立という卑小な帝国主義ディスコースを糾弾する働きを持っている。同様に、語りの分裂という作者の小説技法の追及は、芸術的効果をあげるだけではなく、支配や権威といった政治的要素をも確かに揺るがしている。そしてこの芸術と政治が渾然一体となった小説世界こそが、フォースターの目指した「政治よりも大きなもの」を示しているのである。